

発達障害児支援における子どもの主体性を尊重する支援態度に関連する要因  
—発達障害の知識、理想の子ども像、共感性からの検討—

福祉心理学専攻 菅原佐和子

要 旨

本研究は、発達障害を有すると考えられる子どもの増加に伴って障害児支援サービスが拡大される一方で、その内容の質の格差や低下の問題が生じていることを受け、障害児支援の質を向上させる要因について検討したいと考えた。近接領域である保育の質を高める要因を参考に、障害児支援の質の重要な要素として支援者の「障害のある子ども本人の最善の利益の保障」を考慮し「人権に配慮した支援」を追求する支援姿勢に着目した。これはすなわち子どもの行動や様子の背景にある思いを能動的に拾いあげて受け止め、子どもの思いに寄り添い、どう乗り越えるかを共に考え深めていくという応答的資質であり、子どもの主体性を尊重する支援態度と言える。そして子どもの主体性を尊重する支援態度の形成に関連する要因として、先行研究で明らかとなっている態度の形成要因のうち、①態度対象に対する情報（知識）、②所属集団の信念・価値・規範といった社会・心理学的要因（価値観）、③個人特性に焦点を当て、それぞれ①発達障害の知識、②支援者が子どもに抱く価値観である理想の子ども像、③支援者の個人特性である共感性を取り上げ、障害児福祉サービスに携わる支援者を対象に自記入式で無記名式質問紙調査を実施し、その関連性の検討を行った。

仙台市内において児童発達支援と放課後等デイサービスを提供している32施設約257名に協力を依頼し、16施設から回収した111部のうち有効回答であった95名分を元に分析を行った。調査では、回答者の属性に関する項目と共に、発達障害に関する知識を測る15項目、望ましいと思う子どもの姿、つまりどのような子ども観を持っているかを測る10項目、回答者の個人特性としての共感性を測る15項目、子どもの主体性を尊重した支援の実践程度を測る15項目について段階法にて回答を得た。分析では、得られた回答を得点化した後に因子分析を実施し、「発達障害の知識尺度」「理想の子ども像尺度」、共感性に関する尺度として「視点取得尺度」「被影響性尺度」、「子どもの主体性を尊重した支援尺度」を構成した。その後、因子分析にて抽出した項目について合計・得点化し、平均値で高群と低群に分け、知識群、理想群、視点取得群、被影響群として主体性尊重得点との分析に使用した。

分析1として発達障害の知識、理想の子ども像、視点取得と子どもの主体性を尊重した支援の関連性、分析2として発達障害の知識、理想の子ども像、被影響性と子どもの主体性を尊重した支援の関連性について3要因の分散分析を実施した。その結果、発達障害の知識についてはそれ単独では主体性を尊重した支援との関連性は見られなかったが、他の要因と組み合わせることで主体性を尊重した支援と関連性を持つ傾向があることが示された。発達障害の知識の量による主体性を尊重した支援への影響は、視点取得が低く、かつ理想の子ども像が弱い場合でのみ見られ、この条件でのみ発達障害の知識が多い者が、少ない者よりも主体性を尊重した支援をする傾向にあった。理想の子ども像については、理想の子ども像が強い者の方が、弱い者よりも主体性を尊重した支援をしにくい傾向があることが明らかとなった。共感性については、視点取得が高い者の方が、低い者よりも主体性を尊重した支援をする傾向があることが明らかとなり、被影響性については主体性を尊重した支援との

関連性は見られなかった。

このことから、「子どもの主体性を尊重する支援態度」という観点というから障害児支援の質の向上を図るには、支援者の中に発達障害の知識以外に、相手の立場を考え相手の視点に立とうとする意識を高めることや、本人の特性や発達段階との兼ね合いの中でバランスをとりつつ子どもに過度に大人やルールへの従順さを求めない姿勢を備えることが有用であることが推定された。